

族を喩す歌一首 併せて短歌

20-4465

久方の 天の門開き 高千穂の 岳に天降りし 皇祖の 神の御代より はじ弓を 手握り
持たし 真鹿子矢を 手挟み添へて 大久米の ますらたけをを 先に立て 鞆取り負ほ
せ 山川を 岩根さくみて 踏み通り 国求ぎしつつ ちはやぶる 神を言向け まつろは
ぬ 人をも和し 掃き清め 仕へまつりて 蜻蛉島 大和の国の 檀原の 畝傍の宮に 宮
柱 太知り立てて 天の下 知らしめしける 天皇の 天の日継と 継ぎてくる 君の御代
御代 隠さはぬ 明き心を すめらへに 極め尽して 仕へくる 祖の官と 言立てて 授
けたまへる 子孫の いや継ぎ継ぎに 見る人の 語り継ぎてて 聞く人の 鏡にせむを
惜しき 清きその名ぞ おぼろかに 心思ひて 空言も 祖の名絶つな 大伴の 氏と名に
負へる 大夫の伴

20-4466 磯城島の大和の国に明らけき名に負ふ伴の男心つとめよ

20-4467 剣太刀いよよ磨ぐべし古ゆさやけく負ひて来にしその名ぞ

右は、淡海真人三船が讒言によりて、出雲守大伴古慈斐宿禰、任を解かゆ。ここをもちて、家持この歌を作る。

【口語訳】

(ひさかたの) 天の岩戸を開いて、高千穂の峰に天下った、皇祖たる神の御代以来、はじ弓を手にお持ちになり、真鹿児矢を手に挟んで添えて、大久米のますらをたちを先に立てて鞆を負わせ、山川を磐根踏み分け通って国を求め、荒ぶる神を降伏させ、従わぬ人をも軟化させて掃討しお仕えもうして、(あきづ島) 大和の国の檀原の畝傍の宮に、宮柱を太く立てて天の下をお治めになった皇祖たる天つ神の後継者だと、受け継いで来た大君の御代ごとに、隠れなき忠誠心を皇室に示し尽くして、仕えて来た先祖以来の役目である」と明言して授け給うた、その子孫たちが次々と伝えて、見る人が語り継ぎ、聞く人が模範にするだろうよ。貴重で高潔な名であるぞ。いい加減に心に思って、かりそめにも先祖の名を絶つな、大伴氏の名を負っているますらおたちよ。

(磯城島の) 大和の国に名高い名を負っている一族の人たちよ、心して努めよ。

(剣太刀) いっそう心を研ぎ澄ますべきだ。昔から高潔な一族として負うて来た大伴の名であるから。